(3) 船上生活者のオーラルヒストリー（三）

語り手：渋田幸子（元・船上生活者）
1945年1月4日生
石橋英子（元・船上生活者）
1946年8月12日生
田上キサ子（元・船上生活者）
1942年1月15日生

聞き手：田上繁、森武麿、安田常雄、安室知
若宮幸一、松本和樹
同席者：田上亘、家次寔、辻村征之
聞き取り日：2012年8月7日
場　所：田上亘宅（若松区今光）

船上で鳩を飼う

安　室：　聞いたものを読ましていただいて、すごく興味を持ったのが、伝書鳩を飼っていて、それでこうオカ（陸）と連絡を取ってたというのを拝見して、写真で確か、誰のでしたっけ。

石　橋：　わたしです。

安　室：　伝書鳩が肩で、それを拝見しまして、ぜひこの話を聞いてみたいと思いまして。で、首輪も何も付けてないものですよね。肩にとまって。これはもう、ペットとして飼っていたということなんでしょうか。

石　橋：　はい。あのですね、父がすごい好奇心旺盛な人だったので、沖に出たときに、いろんなトラブルなどが起こったときに、岸にその拠点を、鳩の拠点を作っててですね、連絡用にしたらいいていう発想のもとに始めたんですけど。でも、結局は、鳩が実際船に棲み付いているから、外で飛ばしても、どこにも行かないんですよね。だから、結果的には、あまり役には立たなかったようです。試験的にやってみて、いろいろ試行錯誤したけれどもですね、だから、船で飼うって、ペットで飼った訳じゃないんですけども、ぜひ連絡にね、使いたいていうことだったんですけど。駄目でしたね。

安　室：　お父さんが、なんていうですか、そういう考えを持って。

石　橋：　そうですね、何度か試みたようです。結局、移動する船の上で飼っていた訳ですか？　役に立たなかったようですよ。

安　室：　ええ。オカの拠点てどこに作っているんですか。

石　橋：　ハシケ船が停まるところなんでしょうね。そこ、ゴンゾウ小屋じゃないんですけど、ハシケが停まっているところに帰ってくるんじゃないかということで、作っていたんですけど。

安　室：　そこは、もしその、沖でトラブルになって飛ばした場合に、誰かが受け取る人がそこにいたってことですか。

石　橋：　ええ。そういう発想でしたと思うんですけれど、実際には頭で考えるような訳にはいかなくて、ねえ。資料に残すほどの役に立ってないと思うんですけど。船で精々飼うぐらいしか。

安　室：　ほかの船でもそういうことは。

渋　田：　全般的にそういうふうな手段で連絡を取ってたかちゅうことじゃない。彼は、英ちゃんのところだけやろね、飼っていたん

は？

石　橋：　この船のっていう意味じゃなくて、父の考えに賛同した人が何人かで試みたようです。何人かがそういう。

渋　田：　そうなん。わたし知らん。

石　橋：　だから、何人かが集まって、「こうしたらいいんじゃないかなあ」と。

安　室：「じゃ、大体これやってみようか」ということで、始めたことなんですか。

石　橋：　何人かですけど。父の勤めていた会社のハシケていうのは、何十艘もあるわけですから、みんなが賛同したていうことでなくて。何人かが、興味本位で始めたということで、と思います。

安　室：　ええ。で、自分がびっくりしたのは、肩に乗って、こうやっているんですよね。

石　橋：　そうなんです。

渋　田：　凄いよねえ。

石　橋：　母から離れないていうことがあってですね、これは新日鐵のアマチュアのカメラマンの方が珍しいといって撮って行かれたんですけど。

安　室：　これ、やっぱり、雛から育てたから、こうなったんですか。

石　橋：　ええ、そうですね。

安　室：　よくねえ、卵を孵化させて、最初に見たものを鳥は自分の母親と思うていうのを聞きますんで。じゃ、卵をやっぱり産ませて、それを育てたということなんですか。

石　橋：　ごめんなさい。ちょっとそこまでは分からないですけど、間違った情報を入れてはいけないので、すみません。よく覚えていませんので。

安　室：　ほかに船では別にペットなど飼っていましたか。

石　橋：　ペットというと、鳩のことですか。

安　室：　いえ、鳩以外でも。猫とか犬とか。

石　橋：　それは、ありました。犬のことはですね。前にもお話したかも分からないんですけど、犬も飼ってたんですよ、鳩の前に。そしたら、犬のお産と子供のお産が一緒になったらいけないということで、犬を、結局もの凄くかわいそうなことしたんですけど（咽ぶ）。捨てに行ったんです。これいったら、泣きそうになる（咽ぶ）。

安　室：　すみません。

石　橋：　妹がちょうど産まれるのと犬のと一緒になったんですよね。結局、妹も海に落ちて死んじゃいましたけれども（咽ぶ）。

安　室：　ああ、そうなんですか。

石　橋：　結構、飼ってたね、犬を。

渋　田：　うん。

石　橋：　ほかに楽しみがないんで。航海に出たりしてですね。でも、オカの人もペット飼いますよね。船に乗ってる海上生活者の人は特に友だちがいないけど。

安　室：　ホームに行かれるときは、犬とかペットは連れて行かれる。連れて行くんですか。それとも船で。

石　橋：　船で。

安　室：　じゃ、土、日しか会えない訳ですね。

石　橋：　土、日とか。いや、会えないんですよ。毎週ですよね。ずーっと仕事に出ていますので。時々しか帰れなかったね。

渋　田：　うん。

安　室：　そうですか。でも、犬のお産と人のお産がやっぱり一緒なのはよくないという。

石　橋：　そうです。

安　室：　という迷信があるんですね。

石　橋：　そうなんです。迷信なのかも知れませんけれども、やっぱり凄いかわいそうなことをしたと思ってます。何十年たっても（咽ぶ）。

安　室：　うん。

石　橋：　ジョンていう名前の犬だったんです。で、伝馬船に乗せてですね、結局、漕いで

岸壁まで捨てに行くんですよね。

安　室：　ええ。

石　橋：　そしたら、ずーっと追いかけて来るんでしょ。

安　室：　その後やっぱり、誰かに拾われたかなんかしたんですかね。

石　橋：　そうですね。

安　室：　岸壁にいればねえ。

石　橋：　すみません（咽んでいることを）。この話するといつも涙がでる。

安　室：　すみません。さっきの鳩の話の続きで、鳩は名前を付けるんですか。

石　橋：　付いてたんですけどね、今はもう忘れちゃったです、なんていう名前か。多分「きんちゃん」かなんか。

安　室：　鳩も慣れ、ね、刷り込みで慣れれば、呼べば応えるとか聞くんですけども。

石　橋：　わたしたちには、あまり慣れてなかったと思います。

安　室：　じゃ、やっぱりお母さんの方に？

石　橋：　そうです。

安　室：　やっぱり女性が飼う方が多かったんですかね、お母さんとか。

石　橋：　うーん、ちょっと分かりませんね、その辺は。

安　室：　犬や猫ていうのは、じゃ、それは子供が飼うことが多いですね。

石　橋：　ないですよ。大人が飼うことが多いように思いますよ。大人ていうよりは、なんですかね、未就学児ですね。小っちゃいとか、そんな感じの子だったら一緒に遊んでいるけどね。

安　室：　ちょっとほとんど。

石　橋：　すいません。

児童ホームでの生活

安　田：　昭和ね。昭和30年ちょっとぐらいの。

石　橋：　そうですね。

安　田：　簡単にいうと、僕文章（「ふだんぎ」投稿文）読んでないんだけど、そこで書かれた中身ていうのは、かいつまんでいうとどんなことを。

石　橋：　先ずですね、軍隊じゃないんですけれど、起床の鐘で始まって、消灯の鐘でその寝る訳なんですけどね。その間の、その生活の中で、みんなで一緒に食事をする。みんなで一緒の弁当を持って学校に行く。みんなで、とにかく、みんなで一緒のことをする訳なんですけど。その中で、それぞれの部屋に子供が、約10人ぐらいずつこう、男子と女子と分かれて入ってるんですよね。その中に室長がいて、ホームの中での先生のいうことはもちろんなんですけど、年上の子が室長になるんですけど。室長の、わたしたち小っちゃい子がいうこと聞かなくちゃあいけないんですね。と、みんなで食事してるときに、大っきい子が自分の好きなおかずがあったら、「それちょうだい」とかいって（笑う）。「あげない」とかいったら、これいじめられて（笑う）。いろんなことが日に子供の中でも戦争みたいな感じであるんですけれども、でも、今のいじめとは違って、その中に、また、今考えるとですよ、ほのぼのとしたものがあって、生活をともにして、寝起きをともにして、大きくなっていった人たちなので、やっぱり、つながりがですね、あるていうふうなことを書きました。

安　田：　小学校3年、ホームにおられたのは、小学校3年。

石　橋：　から中学3年までしか。

安　田：　中学3年まで。

石　橋：　ええ。しかいれない。高校になると、出なきゃいけないんですね。義務教育が終わりますから。

安　田：　じゃ、その寮での生活ていうのは、全体としては、なんていうんですか、楽しい思い出みたいなのは？

石　橋：　今になると楽しいね。そのころは、いろいろあったかも分からないんですけど。

渋　田：　やっぱりあったね。上級生と下級生の。

石　橋：　はい。いじめとかもあるけど、陰湿ないじめはなかったと思います。

安　田：　一番楽しかったことっていうのは、それ寮の。

石　橋：　寮で楽しかったのはですね。ゆき（幸）ちゃん行かんやった。小倉市民会館にね、寮の人が招待されて。児童ホームの人が招待されて行ったときに、野球選手が来られたんですよね。そのときに、野球選手の名前がですね、ちょっと思い出さないんですけど。なんていう人やったかね、とにかく、何人か、5人か6人ぐらい来られて、一緒にゲームしたりしたんですよね。で、それはすごい楽しかったですね。で、結構自分は楽しかったんですけど、回りの人たちから見たら、わたしたち恵まれない子供たちだったんですよね。

渋　田：　そうよね。あんなん招待あったね。あった、あった。

石　橋：　うん、うん。だから、恵まれない子供を招待して、その［　］みたいな感じで。そんとき、西鉄ライオンズ。片山さんやない、違う。

石　橋：　名前はちょっと思い出せない。

安　田：　野球選手ですか。

石　橋：　そうです。野球選手は間違いないです。

安　田：　中西太とか。

森　　：　中西。

安　田：　豊田、豊田泰光。

石　橋：　その人は来ていたような気がする。

安　田：　それと、稲尾だよね。

森　　：　西鉄ライオンズね。

石　橋：　そしたら、そのときにですね、そんな話はまた別の話なんですけど、児童ホームでなかったので、水洗トイレ初めて使った訳なんですよね。そしたら、トイレに行って、水洗を流したらですね、もちろん、水が止まらないんですよね。で、止まらないから、壊したか思うて、何回も押したんです（笑う）。ずーっと止まらないから、そこにいると、先生が「もう会が始まるんやけど、ひで（英）ちゃん、どこにおるんね、どこにおるんね」て、大きな声で呼んでから、すごい恥ずかしい思い出がある。

安　田：　そういうふうに、時々どっかでみんなで行くとか、連れて行ってもらうとか行ったことがあったんですか。

石　橋：　そうですね。

渋　田：　いろんなところへなんか招待されて行きよったね。

石　橋：　うん、うん。海水浴にも行ったことあるしね。

安　田：　今日ちょっとね、さっき、なんだっけ、その学校のね、ホームの方でいろんなお話を聞いたんだけど。で、1つは、船で生活する子供さんがいて、それから、一方で、ほら、養護学校みたいな感じになって。

渋　田：　今ですか。

安　田：　うん、今ね。

渋　田：　はい。

安　田：　そのころ、養護学校の生徒さんみたいな感じの人は。

渋　田：　おらんやったね。

安　田：　船の人ばっかり。

田　上：　こちらの世代はないですね。

児童ホームでの人間関係

渋　田：　違う。こうなんですよ。力関係ともう1つは物質的なことですよね。そやけ、親がちょっとお金持ちの人がおるんですよ、

やっぱり。おなじハシケの人でもね。ほたら、その親が金持ちの、2人おったとしたら、この2人がこう、そやけ、その親が来たときにお菓子とかこう、たくさん置いて帰るでしょ。そしたら、それをほかの人に陰でこそっともらう。ほしたら、その人、こう、付いとかないけん。なんかそんなんがあったね。

田　上：　そのときは、親御さんも（全員笑う）。

渋　田：　派閥が生まれる理由がそうやったと（全員笑う）。ねえ。

石　橋：　そういえば、そうやね。

渋　田：　1人が万年筆をこ（買）うたら、1人が買う、負けんように。ほかの人はそんなもん手も出らんけ、黙っとるけど（笑う）。

石　橋：　そうですよ（全員笑う）。

田　上：　それは親御さんの働きがいいから、お金がある訳。そういう訳じゃない？

渋　田：　どうですかね。

キサ子：　ほら、給料が違うでしょう。大きい会社だったら、それはそうだね。あるだろうと思います。ね。

田　上：　俸給が違う。

キサ子：　サラリーマンとかでも。

児童ホームから船へ帰る

キサ子：　絶対聞こえないけ。ガチャ、ガチャちうるさいけ。そうですね、聞こえん。風で声が流れる。そやから、風で聞こえん。消えてしまう。で、仕舞いに何回も呼んでるけど、聞こえないから、もう仕舞いには涙が出る。情けないんだから。そしたら、知ってる人と代わる。「呼んだげるね」ち、「おーい」っち呼んでくれて。ほしたら、上の石炭を入れるところ、上の方だから、男の人の声だから、バーッて響くんですよ。そしたら、もう迎えにくる。そんなもん滅多にないんですよ。時々だけど。もう帰りたいけど、帰ったら、それが嫌だなあと思ってですね。

田　上：　でも、お父さん方は、大体土曜日の何時ごろ帰ってくると、一応頭の中に入ってるんでしょう。

キサ子：　ねえ。そこにというときもあるけど、結局、決まったとこやなくて、海の上を移動しとるやろ。そんときは、「また、向こうに来て帰っておいで」ていわれたら、普通、仕事しないところは、そこ、そこら会社によって決まっとる訳。

田　上：　どこにいるかね。うん。

キサ子：　そたら、そこなんかね。

田上亘：　17番。

キサ子：　17番。ほして、移動して「黒崎のとこに来てるから、帰っておいで」と。今度、どう行ったらいいか分からんとこがある。よう分からんち。

田　上：　じゃ、黒崎の海の上とはどうやって連絡が付くの。向こうから児童ホームにかけてくれる？

キサ子：　児童ホームに親がかけてくれる。ほしたら、「分からん」ちていったら、そしたら、お父さんが迎えに来てくれる。だから、そこの、ほな、仕事をしてないときには、そこに現場だったらそこに、自分1人で帰って来よる。おんなじ道やからね、知っとるでしょう。そやけど、やっぱり辛かったですよね。呼んでも聞こえないしね。仕舞いにゃ、帰りたい気持ちはもの凄くあるけど、ホームに帰った方がいいと思い、それでも、来た以上、一生懸命呼ぶんだけど、聞こえない。上にのぼりたいけど、怖いからのぼれない（全員笑う）。それはなかったですよね。

田　上：　それで、戻ったこともある訳ね。

キサ子：　戻ったことも、戻ったこともあるんですよ。そいで、もう、帰るときは、食事は要

らないから、「要りません」ちゅうて。ほしたら、帰ったらもうご飯ないんですよ。ほしたら、もう、そこらのご飯を炊いてくださったおばちゃんがいるんですよ。

渋　田：　おった、おった。いしまるのおばちゃん。

キサ子：　弟子丸（でしまる）のおばちゃんちいいよったかね？　その前に、「何か作ってあげよう」ち。

渋　田：　弟子丸のおばちゃんち。

田　上：　そういうのは、ほかにも事例があるわけ。

キサ子：　それは、あると思いますよ。［　］だから。相当おるでしょう。かわいそうでしたね。

田　上：　それじゃ、なに、夏休みだとずーっと一緒に。

キサ子：　そうです。

児童ホームの弁当

渋　田：　あすこが、わたしが床屋さんの先生がですね、やっぱり、「ホームの１期生」ちいよったですね。

安　田：　１期生。

渋　田：　はい。えーと、昭和９年か８年か、そのくらい生まれと思うんですよ。

安　田：　生まれが。

渋　田：　弁当は入れてくれよったけど、ご飯、麦飯のご飯にウィンナーソーセージ。ウィンナーソーセージじゃない。ほら、あるでしょう。

森　　：　魚肉。

安　田：　魚肉ソーセージ。うん。

石　橋：　あれを切って、しおこぶを入れとんですよ。で、学校に行って、お昼開けたら、もうそのご飯もソーセージも真っ黒なっとんですよ、しおこぶで。てんぷら、こうあったら、半分こうなっとるんですよ（全員笑う）。

田　上：　弁当は寮で作ってくれる。

渋　田：　そう、そう。ご飯作ってくれる。賄いの。

田　上：　小学生はね。

渋　田：　給食があるから。

田　上：　じゃ、みなさんはその日は同じお弁当を。

渋　田：　そうです。みんな一緒やね。

田　上：　一緒に開けたら（全員笑う）。

キサ子：　だから、もう船とか帰っとったときやら、小遣いとかもらって来るでしょう。お弁当ないときは、パンとか買えたんですよ。だから、パンを買って、お金持ってるから。それで買って食べた。

安　田：　そういうこともできたんですか。

キサ子：　そうです。お小遣い、先生に預けとくんですよ。ほかにもらっとるんですよ。結局、内緒しよった。あそこ行きよったやろ。そして、あめ玉買って来たりしよったやろ。そういうことも、あれしたからね。だから、時代が時代だったからですね。

安　田：　そうですね。

キサ子：　わたしたちだけやないですから。

渋　田：　そうよね。

キサ子：　全体的にそういう時代やったと思うんですよ。国全体がまだ貧しかったから。だから、田舎とかでも、「仕事がないから、お父さんと若松に出よう」て。お給料とかいいから、出て来るでしょう。百姓だけじゃ、ちょっと食べられんから、そういう時代だったからやね。

渋　田：　若松、あすこ牧野ひでおさん、ねえ、あすこ、牧野さんが施設長してたころですよね、ホーム、テレビとかなかったから、みんなで、その団体で牧野さんの家にテレビ見に行ってましたよ。

ウロさん

田　上：　ウロさんとかのあれは、自分でなんか買うとかは、もうお父さんとかが。

キサ子：　そうですね、お父さんが買って航海に行

くでしょう。そんときになんか持って行かなければいけないから、お魚とかを市場で買ってないと。

田　上：　航海できない。

キサ子：　生活ができないから。それで、結局、あれやらこれやら、ウロさんから買って、そして、魚とか売りに来よった。魚とかね、野菜とかも。ほいで、もう、時間があるときは、オカに上がって、宮丸の市場とかで買う。あと、急に要るときなど、結構いいのを持って来よったですよ、魚とかでも新しいのを。それをしないと、食事ができないでしょう。だから、それを仕入れて、そして、それを持って行きよった、航海に。

ハシケの構造

安　田：　折角っていうかね、今回の研究の中でね、僕これ（2011年の調査時のオーラルヒストリー）読みながらね、例えば、その船そのものの仕組みていうのかな。だから、一番船底がどうなっていて、それから、例えば、階段があって上がって。で、そこに字句は分かんないけど、中二階みたいのがあって、それから、上へ出るとか。で、炊事はどの辺にあって、どんなんが置いてあるとか、そういうなんか、それが一望で分かる絵を描くとかさ、ハシケのね。

渋　田：（ハシケの略図を描きながら）これが炊事場ですよ。

安　田：　はい。

渋　田：　写真の分。

安　田：　それ鳩のやつですよね。

渋　田：　箱にですね、箱にちょっと穴みたいなんがあって、これが海に落ちて行く。これが、高月（石橋さんの旧姓）のおばちゃんが炊事しよるところと思うんですよ。

安　田：　その炊事の場所ていうのは？　これは船の上ですよね。

キサ子：　これは石炭を積んで行くとこ。ハシケは、これ中がこうえぐってあるんですよ。ここは、また通れるようになって、これだけの空いてるところに石炭を積んで持って行かないけん。そこに石炭を［　］たら、おんなしやねえち。

森　　：　小さいのん。

キサ子：　ほして、それをえぐれてる中に石炭がないときは、この中で遊んでいる。

安　田：　そこで遊ぶ。

キサ子：　運動場みたい。だから、真っ黒になっちゃうですよ。「こじき」の子みたいになってから。

安　田：　そうですか。

キサ子：　持って行ったあとだから、遊ぶとこないでしょう。ほしたら、幅が、ハシケち通るところ狭いんですよ。これで、なんか入れるところがぐるーっとなっていて、そこを子供が渡ったら、危なくないから。ここで、えぐったとこ、ブランコなどを作って。

キサ子：　結局、お水とかがなかなか、あれやったから、お水とか買って、ほいで。

渋　田：　ほんとやね。

キサ子：　置いとかないと、お水がないんですよねえ。だから、もう、わたしのお父さんなんか、海でね、「泳ごう」ちて、船をこうなんかね、停めてって。で、海で泳いだり。そいで、最後、水で、だから、水を大事にして。

渋　田：　そう、大事にしてね。

キサ子：　食べるのと、絶対自分で買って行って。あれしとかんと、仕事に行けなかったから。

安　田：　水のタンクていうのは、どこに置くんですか。

渋　田：　特に、うん。この炊事場の近くにタンクがあるんですよ。

安　田：　でも、結構大きなもんでしょう。

渋　田：　大きいですよ。ほして、これを船がロー

リングするから、水が腐らんのですよね。

森　　：　なるほど、動くからね。

渋　田：　じーっとしとったら、やっぱり腐ると思いますよ、長く入れとったら。

田　上：　これ、わたし分からないで、移動なんて書いたけど、それはそこに固定してんですか。移動させてるんですか。

安　田：　ん、移動する？

田　上：　必要なときに船縁に持ってきて、ここでまた元へ。

キサ子：　危ない。用事が済んだらもう。

田　上：　中に入れる。

キサ子：　中に入れる。だから、台所のとこに。一番嫌なのがトイレよね。

渋田・石橋・キサ子：　嫌やったねえ。

キサ子：　下向きやからいいんだけど。この中に入るていうのがですね。小学校のときはよかったんですけど、中学校なったらもうあるでしょう。だから、もう「嫌やなあ」と思うてね。普通のおうちやったら、戸があるでしょう。「誰か見てないか」ち（笑う）。

安　田：　で、いわゆる、その家族が集まる。なんていうのか、居間ていったけど、どこなんですか。

渋　田：　ないです、上には。そやけ、上と1部屋あるんですよね。ご飯食べたり。で、横にちょっとお風呂があるですよね。それからちょっとこう、中にちょっとカマクラみたいなね、いうたら、そういうところに、トン、トンと4、5段降りて、また、階段を上がる。そこで寝る。

安　田：　そこが、寝室なんですね、いわゆる。

渋　田：　はい。

田　上：　食事するところと寝室は畳なんですか。

渋　田：　畳やなくて、ゴザやったんやなかったやろうか。

安　田：　ゴザ。

渋　田：　1枚を重ねたようなゴザやなかったやろか。

安　田：　寝室は？

渋　田：　はい。木でできている。そして、お布団ひ（敷）く。押し込みみたいのもあったんですよ。そこに布団をなおし（仕舞い）よった。

キサ子：　えぐってあるところに石炭入れるところと、余っているところと、ちょっと段が高くなって、部屋が造ってあるんです。そこで寝泊まりされるようになっとるんですね。だから、高さがあったから、こんだけ、あぐるとこんだけえぐってありますね。えぐってある、例えば、これを、［　］。そう、そう、そう。ここを部屋にしたる訳、寝泊まりするような。

渋　田：　そう、そう。戸を閉めた状態の部屋をちゃんと。

キサ子：　ほして、ちょっとこたつを入れるように、ここも高くなって押し入れがちゃんとできとる。一応あったんです。ちょっというたらですね、あったんですね。

渋　田：　ここのとこ。

安　田：　だから、猛烈に効率的にできている訳ですよね。

キサ子：　そうなんです。石炭入れるところと、背の高いところ［　］。こんだけが入れられるんやけ、こんだけよち。これを部屋ちゅうか、食事をしたり、寝たりできるようにちゃんと造ってある。段を高くして、これを少し高くなってる部屋を。それから、階段を上がって、ほしたら、上がれるようになっとる。

若　宮：　前が、この辺が。

渋　田：　そう、そう、そうです。上は真上から見た感じでしょう。

キサ子：　だから、ここが石炭を置く。ほして、これが通る道やけね。

渋　田：　デッキね。

森　　：　これが真上ね。
渋　田：　ここがオモテ、こっちがトモ。
キサ子：　ここのとこに、結局、えぐってるところ、少し高くなってるところ、食事とかされるような状態を造ってある。ほやから、うまい具合にやっぱり面白い格好だけど、生活をするね。屋根があって、雨に、なんですかね、雨が降っても濡れないような状態にちゃんと部屋を造ってあるんです。これの状態で。ほして、これをこの状態で石炭を、仕事の合間に石炭を入れて、こんだけして。ほして、道は幅が狭いけ、だから、ここになんにもないから。
安　田：　ここ、どのくらいあるんですか。
家　次：　それより広いですよ。
田上亘：　こうなっとるけな。これぐらいはある。
キサ子：　あるやろ。横が通って来よう。こうなっちょる。
田上亘：　こうなっちょるけね。
キサ子：　もうちょっとなかったですか、通る道は。揺れたりしたら、あれがないから、ドボーンて落ちちゃうんですよ。だから、こうして、こうほうて行ってですね、ほうて行かないと。だから、航海しとるとき、「あちこち、うろうろしたら、落ちちゃうから、絶対動いたらいけない」ちゅうて。
若　宮：　この中に１本、こういうふうにして、これに対して板を。
キサ子：　板をね、そう、そう、そう。積んだものを、結局、あれしないようにね。
安　田：　ああ、覆い？
キサ子：　そうですね。
家　次：　ちょっとこうなってね、シートを被せる。
キサ子：　だから、シートを被せる。
辻　村：　[　] あるから、絶対使わないけど、石炭とか。
田上亘：　なんか製品運んだりね。
キサ子：　石炭の場合は、これはやらない。裸のまんまなんです。
田　上：　どんなに入っても。
キサ子：　入っても。あれなんですよ。
田上亘：　「あかだし」せないかんやろ。
キサ子：　だから、「あかだし」するポンプがある。お水が入ったら、「あかだし」をして、バーッち、ポンプでお水出してしまんですよ。面白い恰好だけど、生活されるような、あれに造ってある。面白いんですよ、あれが。それでここ。
田　上：　洗面場に行く。
キサ子：　ここのところにある。
渋　田：　木やからね。
キサ子：　ほいで、これにも部屋があるんですよ、この下にも。こっちにも部屋がある。これトモの方、舵がある。段がなっとる。
安　田：　こっちの部屋は。
渋　田：　縄とか入れよったやろ。
キサ子：　[　] を入れよった。いろんなあれを。
田　上：　倉庫にものを入れる。
キサ子：　倉庫に入れるんです。これも入れるんです。こっちは日常生活のあれして、ここは縄とか生活用品とか入れるんです。
森　　：　石炭入れるとこでしょう。
キサ子：　そう、ここんとこ。この図でいうたら、ここが石炭やけ。こっちは住まいの方で、ここは道具ちゅうですかね、やっぱり、道具を中に入れる。
森　　：　ここ。
キサ子：　階段があって、ちゃんとして入れるようにして、綱が濡れないようにちゃんとしてある。
田　上：　これ舵とってる人はなに、雨が降ってるときは、もう。
田上亘：　合羽着ればいい。
キサ子：　そうです。
田上亘：　ところで、この中にあれがあったごとあるど。上にこう、棚にある。

キサ子：　だから、雨が降っても。

田上亘：　これが、ストロークが長いやん。長いから、どうしても、あれが、ちょっと、濡れんようにしとるたい。

キサ子：　合羽を着る。

安　田：　簡単な屋根みたいなのがあった。

田上亘：　そうやね。

キサ子：　ハシケはないね、なかったね。舵の方にね、部屋はなかったちゃ。

田上亘：　部屋はなかった。上の方に。

キサ子：　なかった。だから、合羽着よった。

渋　田：　濡れた状態でやらないとね。家の中はいいけど、外はなかったね。トモやら、こっちやら後ろの。トモやろ、こっちの後ろの方、トモやね。うちはね、オモテにね、ご飯を食べるところに階段 4、5 段［　］しとって。トモにもね、船具を入れるやん。それをね、もう片付けて、わたしたちが、そこで寝られるようにしてくれとった、親が。